

## 大熊町初の日本酒「帰忘郷」が生まれるまで

### 農業が盛んだった震災前の大熊町

大熊町は、面積の約6割を森林が占める自然豊かな町でした。

特に農業が基幹産業だったこともあり、温暖な気候を生かした梨やキウイの果樹栽培が盛んで、熊川を上る鮭、養殖のヒラメも町の特産品として親しまれていました。

### ですが、東日本大震災でその生活は一変。

町内では震度6強を観測し、地震に伴う津波により沿岸部2km<sup>2</sup>が浸水しました。また、それに伴い起こった、福島第一原子力発電所の重大な事故に伴う放射性物質の漏洩により、全町民がふるさとを離れて避難せざるを得ませんでした。

### 震災後、会津若松をはじめ全国の避難先へ

学校として使用できる場所のほか、希望するすべての町民を受け入れられる自治体の規模、医療機関の充実、福島第一原発からの距離を考慮した場所でどこか良いところはないか。

町で検討を進めたところ、候補に浮上したのは会津若松市でした。

すぐに会津若松市へ打診すると、学校として使える廃校に加え、幼稚園のために閉鎖した保育所など役場の拠点になりえる施設をご提供いただきました。

当時、厳しい状況の中で会津若松の皆さまに『自分たちが大熊町民を受入れないでどうする』と言っていただけのことや、そうした人の温かさに救われたことは全町民が忘れることはないと思います。

### 避難先への感謝の気持ちをかたちに

会津若松市に役場本部機能を移転させていただいたあとは、多くのご支援のおかげもあり、復興に向けて町一丸となって取り組みを進めてまいりました。

そしてついに、2019年3月には大熊町に役場新庁舎が完成し、4月には一部避難指示が解除、5月には大熊町内にて業務が再開されました。

これは、会津若松市に多くの町民を受け入れていただき、8年という長きにわたる支えがなければ、到底なし得ることはできませんでした。

このように関わってくださった皆さまから今までに受けたご恩を後世に引き継ぎ、今後も発信していくために、また、帰町後も会津若松市と大熊町のつながりを絶やさないように、感謝の気持ちをかたちにしたいと考え、2020年度に大熊町役場の若手職員が中心となり、「おおくま日本酒プロジェクト」が発足することとなりました。

プロジェクトが発足した2020年度は、関係各所のご協力のもと、酒米の実証栽培、搗精店・酒造店の選定、試作品の醸造、一般公募による日本酒名称の決定などを行いました。

## 大熊町で栽培・収穫される酒米

「帰忘郷」の酒米は、大熊町農業委員会が主体となり、2020年度から避難指示が解除された大熊町大川原の田んぼで、「五百万石」を栽培しています。

収穫された貴重な酒米は、放射性物質検査で安全を確認したのち、福島県郡山市にある搗精工場の「飯島米穀」さんへ出荷されます。

郡山市もまた多くの町民を受け入れていただいたところであり、プロジェクトの趣旨にご賛同いただき引き受けていただきました。

## 高橋庄作酒造店による安心の酒造り

醸造は、お世話になった会津の皆さまとのつながりを大切にしたいとの思いから、会津若松市の酒造「高橋庄作酒造店」さんに引き受けていただきました。

「高橋庄作酒造店」さんは、「土産土法（どさんどほう）」をモットーに、地元・会津の水と米を使い、この地に生きる人びとが、この地に連綿と伝わる手法で、酒造りを行っている酒蔵です。

## 日本酒の名称は「帰忘郷」に決定。（販売名は会津娘 帰忘郷）

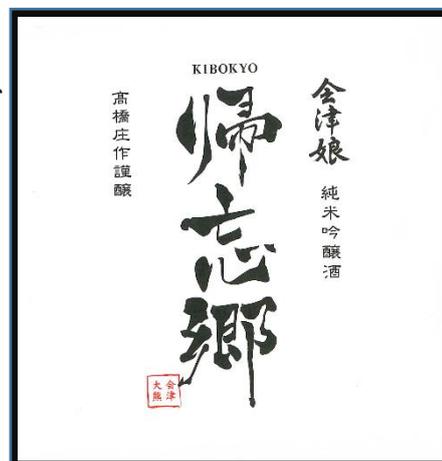
公募の結果、大熊町出身の佐々木真さんから応募のあった「帰忘郷」と名付けられました。この名前には、原発事故後、町民がばらばらになってしまったが常に心には大熊町があり、故郷を忘れずにいる、との思いが込められています。

## 日本酒「帰忘郷」の完成

多くの支援と思いが実を結び、2022年3月11日、皆様の手に取っていただける日本酒「帰忘郷」が完成しました。

町には徐々に町民が戻りつつあり、この地域で再び生活をはじめめる人や新規事業という新しい火を灯そうとする人たちも増えてきています。

震災後、復興拠点としていち早く整理がはじまった大川原地区では、町に住む方が生きがいや復興を実感できるとともに、この町を訪れる多くの方を温かく迎え入れることができるよう、徐々に環境が整備されていきます。



現在、「おおくま日本酒プロジェクト」は『[おおくままちづくり公社](#)』が意志を引継ぎ、町の産業創出と全国の皆様に酒造りを通してもっと大熊町のことを知っていただき、関わっていただくきっかけを創っていきたいという思いから、次の10年における希望を生み出すプロジェクトとして取り組みを続けています。